

国立中央大学 交換留学体験記

経済学部経済学科 佐藤 葵

私は2014年9月から2015年1月末(厳密には2月の初めの週末までですが)まで台湾の国立中央大学で交換留学をしていました。

ここでは時系列別に台湾での生活で感じたことや国立中央大学での講義がどのような雰囲気であったかを簡単に紹介したいと思います。

1. 留学するまで

私が留学を決意したのは2013年の夏休みでした。「卒業するまでに留学してみたい」という思いがふと芽生えました。アジア圏に興味を持っていたということと第2外国語が中国語だったということもあり、留学先は自然と決まりました。そして周囲に日本人がいる環境で中国語を学んでも「生きた中国語」を話せるようになるのかと考えるようになり、それだったら思い切って、中国語を話す人々しかいないところへ身を置き、コミュニケーションをとれるようになりたいと思うようになったのです。

実はこの交換留学の前にも、新潟大学で実施されている台湾スプリングセミナーに参加しました。台湾での生活がどのような雰囲気かということを把握するためです。長期の留学が無理だという方は、こういったプログラムに参加してみるのもおすすめです。

2. 留学期間中

留学してすぐまず部屋探しからスタートしました。留学といえば、通常寮での生活を想像されると思いますが、私の場合留学先の大学が多くの留学生を受け入れたため寮に入ることができず、結果的に大学の外で暮らすことになりました。(いつもという訳ではないですが、そのような事態も起こり得るということです。)アパートの情報は大学側から事前に渡されていたので、それをもとに部屋を探しました。大学近くの部屋は人気が高かったです。すぐにいっぱいになりました。私は大学から徒歩10分くらいのアパートに決めました。理由は大家さんがやさしそうで、かつ静かに勉強できる環境だったからです。ただアパートにはガスコンロがなかったため、毎日外食でした。ですが台湾の料理は日本人の舌に合うものが多く、日本料理屋も多いので、そこは安心でした。また1食当たりの食費も安かったです。

授業選択時はチューターの学生に手伝ってもらいました。中国語の授業は留学生向けのものを選択しました。プレースメントテストがなかったため、中国語のレベル等は語学センターでの先生との軽い面談と自己判断で決めるしかありませんでした。英語の講義もとることができたので、中国語と英語をメインに勉強していました。この時点では自分の中国語に自信が持てなかったため、経済学部の講義は入れませんでした。

このころは本当に聞き取りもうまくできず、発音も悪かったため、友達とはよくノートで筆談をしていました。電子辞書も欠かせませんでしたね。

中国語の講義については、話す授業と古典の授業をとりました。話す授業では韓国人(クラスの7割)、アメリカ人、ベトナム人、フランス人、グアテマラ人という構成で行っていました。このクラスは中国語が比較的流暢な人が多かったため、ほとんど中国語で話していました。ただ最初のうちは聞き取るのが難しかったので、録音して家でもう一度復習したりなどしていました。古典の授業は日本でも学んだことのある「矛盾」や「塞翁が馬」といったものを読

み、その文中に出てくる語彙を簡単な中国語で説明したり、そこから得られる教訓は何か、今でも通じる例を説明したり討論したりという内容でした。

10月に風邪をひいてしまいましたが、学校側が全面的にサポートしてくださったり、チューターの生徒も一緒に病院へ付き添ってくれたりしました。そのチューターの学生からポカリスエットを大量にもらったのが今でも印象的です。このように台湾の方々は本当に親切です。コンビニからの帰りに箸を落とした時にそのことを教えてくれたり、大学行きのバスが別の場所で待機していることを教えてくれたりと見ず知らずの人にも親切でした。

11月は中間試験の時期でした。このころからだんだん自分の言いたいことが何となく話せるようになりました。聞き取りも少しですが自信を持てるようになったので、経済学部授業を傍聴しに行くようにしていました。ここで驚いたのが講義で使われる教科書がすべて英語で書かれていることでした。ある講義ではスライドも英語でした。台湾では英語教育も徹底的で、チューターの学生も英語がとても流暢でした。

12月はとにかく寒かったです。私が住んでいた所は台湾でも寒い地域だったらしく、防寒グッズを持ってこなかったのを後悔しました。というのも台湾の家庭には一般的に暖房はありません。台湾でもホッカイロは購入できますが、それでも寒い時は寒いので服は厚めのものを持っていった方がいいです。ちなみに大学の教室にも暖房はないので、寒がりの人は現地で服を買うといいかもしれません。

1月は期末試験で忙しかったです。冬休みに入ったら共に中国語を学んだ友達と台湾の各地へ遊びに行きました。このころまでになるとノートで筆談ということはなく、冗談も少し言えるようになりました。



墾丁自然公園



九份

3. 留学を終えて

国立中央大学には交換留学生は私一人しかいないという状態でした。しかし正規の学生としてなら、数人ほど日本人の学生もいました。私は極力困ったことがない限り、日本人の方との交流は控えるようにしていました。日本へ帰る前、いろいろな人たちから「中国語が本当に進歩したね！」と言ってもらえました。そういった環境も私の語学力が進歩した要因の一つです。その他に私がしてきたことは、中国語のテレビ(ニュースやドラマ)を見ること、積極的に台湾人の学生と話すこと、日本の漫画の中国語版を読み込んで真似して使うことなどでした。台湾人の学生は日本に対して好意的で、中には日本語が流暢な人もいました。また日本のアニメや漫画が好きな人も多く、アニメ漫画部というのが大学にあるくらい人気です。私もアニメなどが好きだったので、その部活動に何度もお邪魔して一緒に活動したこともありました。私の場合、周りよりも中国語が劣っているように感じて、「必死で聞こう、必死で話そう！ どういう手段を用いても中国語を学んでやる！」と躍起でした。時にはうまく通じずに落ち込むときもありました。そんな時支えてくれたのが、周りの留学生や台湾でできた友達でした。

今回の留学は本当に周りの環境に恵まれていたと感じます。交換留学の枠が空いていたこと、国際課の方々の

厚いサポート、ゼミの先生や日本の友達からの励まし、父の友人に台湾の方がいたこと、同じような考えを持った学生と国を超えて出会えたこと…。この留学にかかわってくれたすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。



授業で中国茶を飲みました。

4. 留学のすすめ

現地へ行ってしまうえば、留学もなんとかできます。しかし闇雲に留学するのではなく、明確な目的意識は持っていたほうがいいと思います。私の場合は「中国語で日本のことを話せるようになる」という小さな目標でしたが、目的意識を持っていれば語学に対する勉強のアプローチも変わってきます。また留学前に留学先の国を知っておくのはもちろんなのですが、日本がどういう国なのかということを意識しておくといいです。中国語の話す授業ではよくそのことを聞かれました。

留学期間についてはやはり留学するなら1年は必要だと感じます。語学で最初の半年、現地での授業で残りの半年というのが理想的だと私は感じました。半年という期間で留学するなら、まず日本で語学の基礎をしっかり学んだうえで、現地でどのような勉強をしたいかを考えておくといいです。

海外へは大学生のうちに行っておくべきです。海外へ行ったら損したという方はほぼ見かけませんし、考え方の幅も広がると思います。正直に言うと、私は英語の成績がそんなに良かったわけでもなく、中国語はというと、読めるけれども話せない・聞けないという状態で行きました。「中国語で話せるようになりたい」という熱意だけでした。こんな私でも交換留学ができたので、皆さんもこの制度を使って、どんどん海外へ行ってみてください。それでも、半年は長い・お金が足りないという方は先ほども紹介したスプリングセミナーといったショートプログラムや奨学金制度などを使っても海外へ行けます。ぜひ活用してみてください。